

日本記者クラブ会報

第404号
2003年
(平成15年)
10月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ

四回目の総裁選(自民)討論会

「アジア取材団」の派遣見送り

先月のハイライトは、十一日に行われた自民党総裁選討論会。北村正任理事長のあいさつ(3ペー
ジ)の後、川戸恵子委員(TBS)の総合司会で午後一時五分から三時まで行われました。

自民総裁選でのクラブ主催の討論会はこれが四回目です。今回もこれまで同様に一部は候補者による「討論」、二部は会場の出席者からのペーパー質問などにもとづく「代表質問」でしたが、各候補には統一テーマとして「日本再生―小泉改革―是か非か」で行うことをあらかじめお知らせしました。一部の司会は影山日出夫委員(NHK)。「経済政策」「外交・安

保」「政治手法」の三つの論点で

討論する予定でしたが(これも通
知済み)、経済政策に時間が予定
よりかかったため、最後の「政治
手法」は二部の「代表質問」でカ
バーすることになりました。司会
者の質問には最初だけ答え、候補
のみなさんとおおむねご自分の在庫
品からの「主張」へと切り替える
ことが多く、議論をかみ合わせる
のは難事だったようです。

二部の代表質問者は、山田孝男
委員(毎日)、橋本五郎委員(読
売)、永野健二委員(日経)、飯野
奈津子委員(NHK)で、四人は
各候補の主張、政策の弱点を端的
に突くことを事前に確認していま

した。

最初に一階玄関に到着したのは、
高村正彦候補、続いて藤井孝男候
補、亀井静香候補、それから十分
遅れで小泉候補でした。十階のシ
ルバールームで揮毫、その後宇治
敏彦企画委員長が確認のためルー
ルを説明し、本番にのぞんでいた
できました。

終了後、NHKの中継で見えて
た会員(会場は二百人で満員札止
め)から数本の電話をいただきました。
「もっとときびしく」という
意見も中にはありましたが、合格
点の評価でした。ラウンジに残っ
た会員の方々の点数もすこぶるよ
く「これまでで一番」という声も。
担当委員のチームワークがよかつ
ただけでなく、やはり出席した会
員のプロの視線、それからテレビ
の全国中継ということ、候補の
方々の充実ぶりも際だったので
ないでしょうか。翌日の朝刊各紙

の扱いも幅広く手厚いものでし
た。こうした紙面展開が、今回の
討論会をさらに内容豊かなもの
にするものと信じます。

結果は各社の予測通り、小泉首
相の圧勝。その直後から企画委員
会は総選挙公示日直前に開催する
「党首討論会」の準備に移りました。

最後に残念なニュースなのが、
第四回の「アジア取材団」の
派遣を中止することになりました。
昨年はシンガポール、マレーシア、
ベトナムの三カ国を訪ねましたが、
ことしは中国の予定でした。

二月ごろから折衝を始めた
が、SARSのため途中で中断。
夏休みに北京に戻った黄星原参事
官(特別賛助会員)が再度外交部
の幹部と相談してくれたのです
が、クラブが希望する胡錦涛主席
ないしは温家宝首相の会見は秋の
日程が立て込んでいるためむずか
しいとの結論でした。

このことを事務局から理事長、
企画委員長に報告した結果、こと
しは見送り来春以降で再調整する
ことになりました。

(専務理事) 岩崎 玄道



自民党総裁選討論会(9.11)

無
限
即
誠

電
影
裏
光
斬
春
風

2003. 9. 11.

義
實

平成十五年九月十一日
高村正彦

永野健二
飯野奈津子
川戸恵子



最後に到着。控室で「電光影裏斬春風」と揮ごうした小泉候補

▶時間:午後1時5分~3時▶第1部(65分)「日本再生—「小泉改革」是か非か」をテーマに各候補が主張(持ち時間2分)の後、「経済政策」「外交・安保」のテーマで討論(発言は1回原則1分)
▶第2部(50分)会場の出席者から集めた質問をもとに企画委員会の代表が各候補に質問し、議論を深めた▶総合司会=川戸恵子、第1部司会=影山日出夫、第2部の代表質問者=橋本五郎、山田

孝男、永野健二、飯野奈津子の各委員▶出席者:ペン取材200人(申し込み先着順)。スチルは東京写真記者協会8社、外通3社、外人記者クラブ代表1社のプール▶テレビはNHKが地上波、ラジオ、BSで生中継(視聴率は地上波で関東3.2%、関西4.5%)。民放はTBSが代表で中継取材。ENGはニュース映画協会代表でNTV、外通代表はCNN。

◆北村理事長あいさつ

八日に自民党総裁選が公示されたことよって、いま、国民の目は政治の場に強く引きつけられております。日本の首相の座に最も近いところ

きたことは、自民党自身にとってだけではない、国民全体にとって望ましいことであると考えております。わが国のジャーナリストのいわば

たつて、各候補者の政策と識見と人柄を十分に引き出し、加盟各報道機関を通じて、全国津々浦々に広め、国民が政治のあり方を考える判断材料を提供することにあります。

本日の討論会にご出席いただきました四人の候補者の方々に深く敬意を表したいと存じます。どうぞ心おきなく、思う存分の論戦を展開していただき、みんなの期待にこたえていただくようお願いいたします。



開始直前、カメラマンの「握手してくださいーい」に応じた4候補

代表質問は橋本、山田、永野、飯野の各企画委員（右奥から）



総合司会の川戸企画委員



▲最後に北村理事長が記念のクラブタイを贈った



◀第1部司会の影山企画委員

写真提供 毎日新聞社/産経新聞社/栗田格会員

ゴールドマン研究者夫妻 (ハーバード大学)



9.1 (月) 研究会 司会 村松泰雄委員
通訳 澄田美都子 出席 60人

▼夫妻で語る中国、ロシアの現状
夫のマーシャルさんがロシア経済、妻のマールさんが中国現代史専攻という「おしどり夫妻」の登場は、記者クラブ始まって以来とのこと。ひと月にわたる両国視察行の帰路だが、疲れもみせず熱弁をふるった。エリツイン・ロシアにおける私有化は「史上最大の盗み」だった。一九九七年のフォーブス誌の世界億万長者リストに突然登場した五人のロシア人富豪はそれまではほとんど無一物の人たちだった。これらひと握りのオリガルヒ誕生のかげで国民の三分の一を貧困線以下におちこませた「改革」には、今

も国民の七〇〜九〇%が不満をもっており、体制の土台は不安定だ。国民の財産を盗んだオリガルヒには同情できないが、自分の気に入らないオリガルヒは国外追放にしたり強制捜査する一方、盗聴やマスコミしめつけ等々の復古策を強行しているプーチンに同情するのは、もっともむずかしい。中小企業は創業が困難なうえ、「国家契約とワイロなしでは生存しにくい実状で、独立自尊の中産層への道はほど遠い」。そう語るマーシャルさんの近著「強奪されたロシア経済」は、今秋日本でも出版される。

マールさんは言う。中国最大の政治課題は内陸部と国有部門から流出してくる二億八千万人の働き口をつくり出せるかどうか。「中国民主党」は圧殺されたが(九八年)、数百万の村落で選挙が行われている。ロシアとちがい変化はボトム・アップで起きるだろう。

個人会員 (NHK出身)

鈴木 博信

菅 直人 民主党代表

▼合併後の主導力に自信

小泉純一郎首相の登場以来、その根強い人気に民主党は手を焼いてきた。菅氏にとっては次の総選挙がいよいよ勝負どころである。世間の風向きがようやく変わってきたと感じてもいるようだ。政権交代を目指して踏み切った自由党との合併に触れながら、「日本社会の流れを変える政権をつくる」と意気込みを語った。

それでも合併の危うさを拭いきれないからだろう、会場からは小沢一郎氏が力を持ち、権力の二重構造にならないか、「小沢氏の処遇は」と質問が相次いだ。菅氏は「私はだれの手のひらにも乗らない。小沢氏が乗せようと思ったらい。小沢氏が乗せようと思ったら失敗する」。主導力に自信を見せ、



9.3 (水) 研究会 司会 村正敏理事
和田圭委員
出席 153人

政権を取れば「二重構造」にならぬよう小沢氏にも入閣してもらうとも主張した。

十八歳から選挙権を与える。一票の格差を是正する。衆院比例区の定数百八十を百程度に減らす。事務次官会議は廃止する。そんな具体策も示したが、党内論議のさなかだっただけに「マニフェストに盛りこむかどうかは別」と断る慎重さも忘れなかった。

自民党内が総裁選を目前にすつたもんだしていた時でもあり、先に手のうちは明かせないという思いはあっただろう。だが、憲法や安全保障といった問題には触れなかった印象は否めない。

埼玉県知事選挙の結果を引き合いに出したように、「小泉支持」が自民党候補への投票に必ずしも直結しなくなってきた変化は確かにある。なお超えるべき山はいくつも待っているが、自ら強調した「しつこさ」で乗り切れるか。

朝日新聞論説委員

福田 宏樹

ク ラ ブ ゲ ス ト

山内 和也 東京文化財研究所主任研究官

▼文化財復興“最前線”

バーミヤン遺跡は、アフガニスタンの内戦中にタリバンによって大仏が破壊された。日本チームが、保存修復中の石窟から七十三年ぶりに仏典を発見し、大きな注目を集めている。山内さんが「文化財復興」の最前線の苦勞話を披露した。

「嘆きの丘」として知られる遺跡は、ソ連侵攻時代に「地雷の丘」に姿を変え、撤去作業は爆破せざるをえないため、遺跡の破壊作業になること。ハザラ人が多い現地で、作業員集めにタジク人に声をかけ抗議されたこと。石窟は現地の人々が住んでいたので、NGOがキャンプをつくり、移住してもらったこと等々。日本の発掘現場では想像のつかないことばかりだ。

日本チームが取り組んでいるのは石窟内の壁画の保存修復で、発掘調査ではない。盗掘などではがれ落ちた壁画の破片を床面から拾い集める。将来もとの壁に戻すために、落ちていた場所の記録も必要だ。細かい壁画片も取りこぼさないよう、こまごまになった壁の上にいたるまではいて集める。それが遺跡の清掃だが、一般の人にはその必要性さえ理解しがたいことだろう。

爆破された大仏を復元できるのか？ 玄奘の記録にある巨大な涅槃仏が発見されるかどうかに関心は集中した。専門家の一部も例外ではなく、現に涅槃仏狙いの発掘に取りかかっているフランスの研究者がいて、各国から批判が出ているという。一発狙いではなく、あくまでアフガンの戦後復興の一環として、現地の人々も含め遺跡の復興が重要だと強調した。日本の国際貢献は、息の長い取り組みが必要だ。



9.17 (水) 研究会
「バーミヤン遺跡の現状」
司会 長沢光男 委員
出席 54人

日本放送協会解説主幹

毛和雄

ケビン・ライアン ポジティブ・ライブス ディレクター



9.18 (木) 研究会
「HIVエイズ」
司会 宮田一雄 委員
出席 K・スターリング
28人

▼写真展で伝える感染者の姿

地球上では現在、推定四千万人がエイズの原因となるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染して生きている。それぞれに生活があり、喜びも悲しみもある。ごく当たり前のことなのだが、うっかりすると忘れてしまいがちなその事実を、世界中の人たちに伝えるにはどうしたらいいのか。

英国で国際商務の弁護士として活躍するライアン氏は写真と証言で感染者とその家族、友人、知人の姿を伝える国際写真展「ポジティブ・ライブス」のプロジェクター・ディレクターでもある。自らもHIVに感染している。打ち合わせの時に「そのことも紹介してくれないか。それから、この仕事はボランティアでやっていること

もね」と注文された。写真展は一九九三年にロンドンで始まり、一回だけの予定だったが、反響が大きかったので世界各地で開催されるようになった。二十六カ国で二百万人以上が見ているという。今回はUNギャラリーでの開催（東京都渋谷区神宮前十月十八日まで）にあわせ来日。「世界中でいろいろな人がHIVに感染している。生活も異なっている。共通しているのは偏見や社会の無知と立ち向かわなければならぬことだ」

十年前に写真展が始まったころの英国もそうだったという。握手でうつるのでは、同じ部屋にいたら感染するかもしれない？ 十年前といえば、日本でも握手で感染しないといった程度のこととは常識だったように思うのだが、少し時間がたてば忘れてしまうこともある。知識が普及するというのには容易なことではないらしい。

産経新聞編集局次長

宮田 一雄

ギンター・フェアホイゲン EU拡大担当委員

▼新規加盟国のパワーに期待

来年五月、中東欧諸国やバルト三国など十カ国の新規加盟で、加盟二十五カ国、域内人口約四億五千万人の巨大市場となる欧州連合(EU)。拡大担当の欧州委員としてその実現に尽力。日本からの投資拡大を訴えるため来日した。

しかし、気になるのが、米国のイラク攻撃に反対したドイツ、フランスと、米国を支持した英国、スペイン、それにポーランドなど新規加盟国との間の不協和音。会見でそこを突かれると、「いい質問だ」と苦笑い。「外交や安全保障の主権は、加盟各国が持っている。欧州委の所管ではない」とEU外交の限界を認めた。一方で、「新規加盟国は、米国の政策が(社



9.24 (水) 記者会見
司会 矢島誠司
通訳 澄田美都子
出席 加藤紀子
53人

会主義体制の) 解体をもたらしたと感謝し、米国との緊密な関係を維持してきた。これを(EUと)米国との良好な関係づくりに活用できる」と、逆に新規加盟国のパワーに期待した。

国際刑事裁判所などをめぐってもEUと対立する米ブッシュ政権の単独行動主義に対しては「民主主義、人権侵害への反対など、EUと米国の戦略は一致する」と協調関係づくりを楽観視する。ドイツ出身。中道の自由民主党(FDP)から転じ、シュレーダー首相の与党、社会民主党(SPD)に一九八二年に入党、外務政務次官などを務めた後、九九年から現職。以後、「政党の会議には出席していない」と話すが、EU拡大はドイツの国益にもかなう。「シュレーダー首相の強力なサポートなしに(EU拡大)の実現はなかった」と、「古巣」の仲間との連携をアピールした。

中日新聞・東京新聞外報部

熊倉 逸男

カール・ビルト 米国ランド研究所理事



9.29 (月) 研究会
「米外交の行方」④
司会 小池洋次
通訳 澄田美都子
出席 71人

▼パレスチナ問題がカギ

外交・安全保障問題に取り組んでいるカール・ビルト氏(元スウエーデン首相)を迎えての研究会は米国と欧州の関係がぎくしゃくしている折だけに、示唆に富むものだった。スピーチとその後質疑を通じての同氏の意見を要約すると。

一、冷戦時代、ソ連の脅威に対抗して、米欧の関係は緊密だった。ソ連解体以後、米欧関係は新たな段階に入ったが、アメリカと欧州は共通のビジョンが打ち立てられていない。米国はNATOの中東への拡大をためらわない。しかし欧州はNATOの新たな役割を、戦争同盟から平和維持活動による平和構築に移行させたいと望

んでいる。

二、アフリカ事態などで、米国の抜き目の欧州独自の活動を考えるべき時を迎えている。米国単独主義では不十分である。実行力を伴う効果的多極主義の道が望ましい。

三、イラクの戦後復興はこの地域安定とエネルギー問題で重要だが、パレスチナ紛争の解決はそれ以上に重要だ。パレスチナが解決しなければイラク復興も成功しない。優先順位を正しく把握すべきだ。

ビルト氏は、パレスチナ問題解決なくしてイラク問題を含む中東和平の根本的解決は難しい、欧州の立場はアメリカと異なる、と述べ、言外にカギは米政権がイスラエル寄り政策を改めることにあると、示唆した。

九一年から三年間、スウェーデン首相を務め、現在まだ五十四歳の若さ。政界復帰の意思を問われ、「同じことは二度やらないのがわが人生の原則」と答えた。

個人会員(産経新聞出身)

澤 英武

上映後、期せずして拍手が起きたが、これは現代の日本人に深い共感とあわせてやや重い課題意識を呼び起こす作品といえよう。

江戸中期、東北のある農村の物語。その村には、六十のよわいを迎えた者はみな、村を出て人里離れた「蕨野」の丘に移り住む掬がある。山々の雪が溶け出す春に村を出てワラビ野に入ったジジババ（ワラビ衆）は、自ら耕すことは許されず、毎日、里に下って仕事を手伝い、その日の糧を得るが、雪に閉ざされる冬を越すことはできない。

映画は村田喜代子の原作に忠実であり、ワラビ野に入る庄屋の姑レン（市原悦子）と若き嫁ヌイ（清水美那）（新人）の（心の）対話によって進められる。そして、長雨が続く冷夏のその年、庄屋たちは取り入れの秋の前にワラビ衆の仕事納め（里へ下ることの打ち切り）を決める。それは、ワラビ衆にとつて冬を待たずにあの世へ行くことを意味する。しかし、そこから、たやすく「生」をあきらめないレ

試写会

蕨野行

私たちの壮絶な物語が始まる。市原、清水のほか、石橋蓮司、中原ひとみ、李麗仙などが原作者の創り出した一種独特の日本語を不自然でなく操り、好演しており、恩地日出夫監督は原作の映像化に見事に成功している。

辛夷の花咲く春先の風景から雪山のラストシーンまで山形飯豊山麓での一年がかりのロケで撮影され、カメラマン（上田正治）は、物語の撮影のほかにも幾度となく野山の四季を撮りに現地へ赴いたという。懐かしい田園風景をふくめ、全編が美しい映像詩でもある。

なお、平成九年にNPO法人「日本の原風景を映像で考える会」を立ち上げ、情熱を傾けてこの映画を完成させた金蔵法義氏（昨年農水省を退官、現在日本グラウンドワーク協会専務理事）は、一貫して地域社会の豊かな環境づくりに打ち込んできた霞が関の異色の存在である。

黒川 次郎
（個人会員 NHK出身）

■会議報告■
第324回企画委員会

（9・1 宴会場）
「自民党総裁選討論会」について協議したほか、今後のゲスト選考について意見交換した。

出席 宇治委員長、山田、永野、矢島、宮田、春名、谷口、影山、飯野、羽生、川戸、矢水、和田、熊村、鳥居、村澤、重村、長沢、ワーグナーの各委員。

第151回施設運営委員会

（9・9 小会議室）
新委員の平間節テレビ朝日報道情報局映像センター長（田・岡井哲太郎氏）が紹介された後、七月、八月の貸室利用状況とアラスカ売り上げが事務局から報告された。

出席 岡元委員長、柴田、冷水、平間、今田、田村、古野の各委員。
第245回会報委員会

（9・10 小会議室）
八月号、九月号、記録版について意見交換した後、十月号の編集方針を決めた。

出席 住田委員長、仙石、永井、福沢の各委員。
第313回会員資格委員会

（9・12 小会議室）
十月一日付の会員入退会を審議

し、理事会に答申した。
出席 滝鼻委員長、佐藤、田中、船田、工藤の各委員。

第385回理事会（書面）

一、別掲の理事交代を了承した。
一、クラブ賞規約と内規にもとづき、二〇〇四年度日本記者クラブ賞の実施を決定した。

一、同賞推薦委員会の構成を左記のように決定した。日本新聞協会・審査室長の山崎茂男氏と日本民間放送連盟・編集部長の田場洋和氏の後任委員に、佐藤信行氏（元共同通信編集委員長）と相田洋氏（元NHKディレクター、96年度クラブ賞受賞）を委嘱した。

二〇〇四年度日本記者クラブ賞推薦委員会（*印新任）
委員長 藤原房子（日経出身）
委員 浅井泰範（朝日出身）
委員 細野徳治（毎日出身）
渡辺みどり（NTV出身）

*佐藤信行（共同出身）
*相田 洋（NHK出身）

△理事交代▽
山陽新聞社
（新）松田 正己 東京支社長
（旧）小山 敬雄

第六回記者研修会

8月28日(木)

◇13:30～15:30(10階ホール)

研究会「地方から日本を変える―

地方分権の進め方」北川正恭・早

大大学院教授 堂本暁子・千葉県

知事 増田寛也・岩手県知事

司会 菅沼堅吾企画委員

出席 196人

◇16:30～17:30

見学会 共同通信新本社ビル「汐

留メディアタワー」

◇18:00～19:00(10階ホール)

グループ懇談会

8月29日(金)

◇10:15～11:45(宴会場)

研究会「40年記者の失敗と教訓」

中馬清福・朝日新聞常勤顧問

司会 岩崎専務理事

◇12:00～14:00(10階ホール)

石原慎太郎・東京都知事昼食会

司会 宇治敏彦企画委員長

代表質問 影山日出夫企画委員

出席者 284人

◇14:30～16:00(宴会場)

研究会「外国特派員から見た日

本のプレス」ゲブハルト・ヒー

ルシャー前南ドイツ新聞極東特

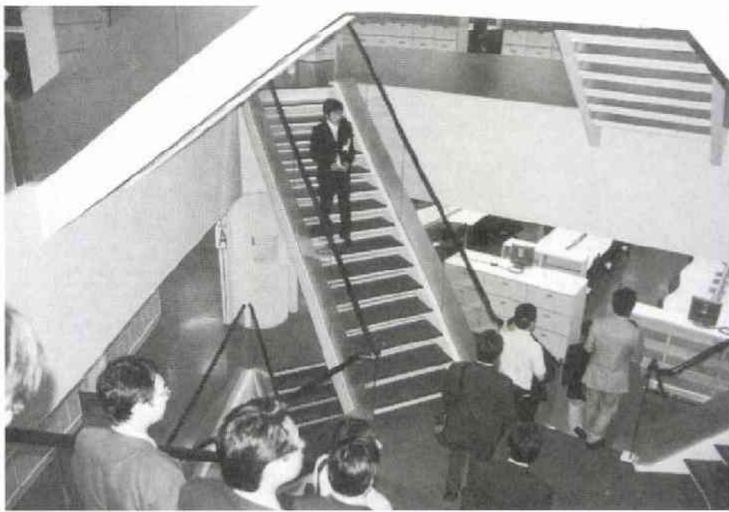
派員 司会 岩崎専務理事

△参加▽

計45社78人(新聞・通信 31社

60人 放送 14社18人)

共同新本社ビル見学会 15～20階が編集局、各フロアの中央の階段でつなく、各部の往來を円滑にするための工夫



40年記者の失敗と教訓

記者ならだれもが多かれ少なかれ経験をしたことのある失敗や落とし穴。そこからどんな教訓を得るか。四十年の記者生活で積み上げてきた体験談は聞きこたえがあった。

中馬清福氏は、誤った情報による事実誤認から、多くの兵士が命を落とした「ダバオ水鳥事件」に触れながら、曇った目では瓦礫も真珠に見える「思い込み」の怖さを強調した。

中馬氏の言うように、一度そう思い込むと、それが事実であるかのように肯定したり、裏付けるような情報が不思議と集まってくる。しかしその時には、それが錯覚であることに気付かず、深みにはまってしまう。

「君だけに教えるから」との甘い言葉に舞い上がったこともある。特に選挙報道や政治がらみの話は要注意。あちこちに落とし穴が、ぽっかりと口を開け、待ち構えている。

3分の冷静 7分の熱い血

中馬氏は誤爆、空爆などの言葉を吟味せずに安易に使う最近のマスコミの風潮に警鐘を鳴らし、記者の知識不足や取材の不十分さ、中でも「なまけることはたちが悪い」とした。「記者は義に厚く、情にもろい森の石松。三分の冷静さと七分の熱い血があった方がいい。主観が伴わなければ、客観報道はできない」とも言った。

確かにその通りだと思っただ。しかし一方で、耳の痛い話だとも思った。型にはまった記事に逃げ込み、なまけたり、流されてはいないか。報道される側の人権を尊重する危機管理意識は十分だろうか。そして何よりも、問題の本質を追究する情熱を持ち続けているだろうか。

地方紙記者として十五年目を迎えた今、取材の原点を、もう一度見直してみようと思った。高知新聞政治部記者

岡林 直裕

▼「千両役者」とは、こういう人のことを指すのか。昼食会で会見した石原慎太郎都知事のことだ。

自民党総裁選を控えた時期だけに、三百人近くが会場を埋め、会見前から存在感がずしり。

話はまず、官僚のコスト意識のなさをやり玉にあげ、大気汚染、和算の関孝和、カジノと話題は縦横に。加えて橋本派批判などで得意の毒舌。聞く者の納得、反発はいずれにせよ、「慎太郎ワンマンショー」でも演じているかのよう

参加者の声

千両役者／改革派の視点

▼「三位一体の改革」―これは、この国の政治、国と地方の関係を根本から考えなおすことに（うまくいけば）つながるものだ。知事らが示した提言は増田氏が言う「霞が関の改革」に向け、地方からその主張を発信しようというもので、評価されるべきものだろう。問題となるのはどんな財源をどう地方に移譲するのかという点。私自身の中に明確な答えがないこともあって議論の行方に注目したが、その答えまでは示されなかった。「分

に、会場を盛り上げていく。

石原新党など生臭い話題には肩透かしを食わせたが、政治家が持つべき責任の重さを力説。最後は「本場に（日本は）ふやけた国になった」と、憂国の思いをボツリ。そこには、今後の政治活動への決意がにじんでいるようでもあった。今秋からの政局は、この毀誉褒貶の激しい「千両役者」にどんな舞台を用意するだろうか。

北海道新聞東京支社
政治経済部次長 福田 淳一

権」はやり方によっては「勝ち組／負け組」を生むことにもなりかねない。この改革が本当に意味あるものになるのかどうか、お題目のように唱えられ続けた「地方分権」を具体化するにはどんな方法論があるのか、きちんと検証していかなくてはと改めて感じた。また、「道州制を「ひとつの必然」としつつも「市町村が基本」と強調する堂本氏の言葉も印象に残った。

静岡放送報道制作局情報
センター記者 大石 晴巳

外国特派員から見た日本のプレス

ヒールシャー氏は七〇年代から日本の閉鎖的な記者クラブに参加を求めてきたというだけあって、その話にはいろいろ考えさせられた。

古くは田中金脈問題、最近では外務官僚のリークに乗って田中真紀子大臣をやり玉にあげた例を引きながら、「いつも同じ人と会っているから癒着を生みやすい」と指摘。これは厳しく受け止めなければなるまい。ただ、それで「三カ月以上、同じ場所を担当しないようにすべき」という提案は現実には難しいと思えた。日本のようなウエットな社会では、緊密な関係をつくらねば得られない情報も多い。それが外国特派員の目からは大きな壁に見えるのだろうか。

「密着」と「癒着」

私も地方自治体の政治や行政を担当して足かけ十年になるが、パイクを築きながらも、第三者の立場を守るという点では腐心している。まさに「密着」と「癒着」は表裏一体で、そこを相手側（私の

場合、地元行政）も勘違いして「全国紙も批判しないことを、地元新聞が率先して批判するのはなぜだ」などと言われることもある。そこを突っ張れるかどうかはクラブ制度というより、記者個人の良識や気概に負うところが大きく、それだけに危うさもある。

われわれ地方紙にとつて記者クラブは邪魔に思うことも少なくない。情報もれを防ぐという点では、地方では人員の少ない全国紙に便利な仕組み、みなのかもしれない。逆に、私も東京勤務時代は、クラブ加入のメリットを感じることも多かった。一方で、クラブ依存が取材の足腰を弱める危険も実感した。ヒールシャー氏が世界にもまれな制度と強調した日本の記者クラブ。既得権を守った「特ダネ」「特落ち」を防ぐための安全パイとしてのあり方は、大いに見直すべきなのだろう。

京都新聞社会報道部
自治担当記者 高田 敏司

▼地方分権は、国から「与えられる」ものではなく、地方から要求して「獲得」していくものである、とあらためて感じた。本県の増田寛也知事をはじめ、堂本暁子千葉県知事ら全国の改革派知事の活動を頼もしく思う。

依然として中央集権的な色彩が濃い国の統治機構。省益確保にきゆうきゆうとする中央官僚に対し、六県知事が行った補助金の緊急提言も、国に改革を迫る動きとして評価したい。

▼地方分権が叫ばれながら「霞が関支配」「東京一人勝ち」を抜け出せない現状の中、北川前三重県知事らによる研究会では、タイムトリ「地方から日本を変える」明確な意思を感じた。増田岩手県知事、堂本千葉県知事は前日に国庫補助金見直しの緊急提言を発表したばかり。非常にタイムリーで、地方行政に取材の軸足を置く者として興味深く聞いた。現場に立脚し、説得力を持つ内容だった。

石原都知事については時節柄、

ただ、これまで地方には国を頼り過ぎたきらいがある。地方への財政優遇措置を伴った国の経済対策に呼応し公共事業を前倒しで進めた結果、岩手県でも一兆三千億円を越す県債残高がある。

四月に三選した増田知事は今期を「自立を進める四年間」と位置付けている。国に制度改革を迫る一方、地方自らも行財政構造を改革する努力が求められている。

岩手日報報道部長

作山 充

闘う知事／パラダイム転換

参加者の声

「戦友」たちとの対話

マスコミの側も政局に絡めてとらえがちで、話が拡散してしまったのは残念だ。しかし、制度疲労に陥る日本のスキームの見直しが必要と説く点では、「分権はパラダイムシフト。国の閉塞感を破る手法だ」と語る北川氏と通底していると思える。

地方からの提言が国政を動かす起爆剤となるか。「地方からの報道」を自問する結果ともなった。

福井新聞報道部副部長

森瀬 明

▼堂本千葉県知事、増田岩手県知事、北川前三重県知事が意見交換した「研究会・地方分権の進め方」。財源を国に握られていることが、地方分権を進めるのに、いかに大きな「足かせ」となっているかがひしひしと伝わった。

改革派の三氏だけに、道州制など個別施策でも独自の視点が随所に見られた。中でも、一人が発言中に他の二人が時にうなずき、時に首を傾げる姿に、それぞれが掲げる改革案を住民に示し続けてい

る自負を感じた。増田知事の「行政機構は一国多制度のように選択肢を多様化させ、住民に選んでもらうべき」との発言は、現行制度への大きな問いかけだった。

翌日は石原東京都知事の会見。国の姿勢を「地域の特性を知らず全国一律で規制するから矛盾が多い」と批判。国を動かすため「首都圏で広域行政を進める」と強調。「闘う知事」らは頼もしい。

千葉日報政経部記者

伊澤 敏和

▼記者十五年目。「その日暮らし」に追われる日々。その中で他社との懇談会は予想以上に収穫が多かった。今回、新潟からの参加は私ただ一人。連日、拉致問題、万景峰号など全国ニュースのネタを取材しているとの「自負」も少々あった（もっとも、最前線の担当記者ならば東京まで足を運ぶことは不可能なのではとの突っ込みも聞こえてきそうだが）。

しかし関西、九州…上には上がった。朝駆け夜回り。今すぐ「字

や「絵」にはならなくとも一カ月前、三カ月前のイメージを信じる顔がそこにはあった。しかも、素材に頼りきらず「切り口」や「組み合わせの妙」を探す毎日。その真しかつ抜け目ない態度に敬服した。「企業」でニュースを紡ぎ出す「チームプレー」の時代。だからこそ「個人」のモチベーションに触れた絶好の機会。戦友たちの「告白」にアドレナリンが分泌された。

新潟放送報道部記者

丹羽 崇

▼「地方から日本を変える」研究会はまさにタイムリーな研究会となった。この二日前に彼らが参加する21世紀臨調が「補助金九兆円の削減」の提言を発表したばかりだったからだ。地方が国からの補助金をカットし、課税自主権を求める動きは、構造改革を実現させる大きな第一歩であるように感じる。一方で、補助金の廃止は私たちに豊かな生活を約束してくれるものではない。民間企業でいう「倒産自治体」の出現や、さらなる首

▼地方分権を考える知事たちの討論に続き、港区東新橋に完成した共同通信新本社ビル「汐留メディアタワー」を見学した。編集局は、天を突くような地上三十四階建てビルの十五―二十階に配置されていた。虎ノ門からの引越し前で、政治部や社会部などのフロアにはまだ、人影はない。建物中央の吹き抜け状の階段が、上下階を結ぶ。この階段を、記者たちが慌たたく上り下りする光景を想像していた。「頼みませ」。特ダネ連発を

都集中化が進むかもしれない。だからこそ、今回の提言は非常に有意義で勇気のあることなのだ。

次期総選挙が十一月に迫り、私が担当している愛知各区とも激しいつばぜり合いが始まっている。しかし、「真の構造改革」が実現されれば、国政選挙以上に、地元市町村議会選挙が注目されなければならぬと思う。

中京テレビ放送報道部記者
土屋 健

緊急提言／情報と人的集積力

参加者の声

先輩記者のメッセージ

▼私が住む「福岡」という土地は大きくも小さくもない都市である。そんな中、地方分権の進め方に関しては非常な関心を持った。政令市を、つも抱える福岡県だが実際、岩手・千葉両県知事の話聞いて税金の有効活用はできているのだろうか疑問に感じた。また北川教授の言うように役人の意識改革、これが進まない真の改革はありえないだろう。民間が企業努力により売り上げを伸ばす商品が、簡単に増税の対象になるとい

う安易な手法は、もはや誰にも受け入れられない。次回の選挙でのマニフェストがすごく楽しみである。また我々報道記者がいたるところで必ず直面する「人権」について中馬さんには記者の基本中の基本をあらためて説いてもらった。ネタを前にするといついつい忘れがちな冷静な感覚を持ちつづけること：これを胸に秘めながら取材を今後も続けていきたいと感じた。

テレビ西日本報道部記者
松崎 章浩

ひそかに願う。

窓の外にはマスコミを含む企業の意匠を凝らした超高層ビルが林立する。六年前、東京支社に勤務していたころには、草むらが広がっていた。二〇〇六年、一帯の再開発が完了すると、六千人が住み、六万人が働き、二十五万人が出入りする「都市」になるといふ。汐留の変貌は、首都が持つ情報と人の集積力をも見せつけた。

中国新聞社会・経済グループ
記者 井上 浩一

▼現役知事による地方分権への提言や各紙記者との懇談など充実した研修を通じて、新聞が難しい時期にさしかかっていることを実感した。とりわけ「新聞は生き残れるか」(岩波新書)の著者中馬清福氏の講義は印象深かった。

十分つっこまずにすませる「型はまる」。記者経験三年半にすぎない私だが、選挙がらみで飛び交う情報に右往左往したことなどが思い出されて自戒するとともに、これらは今後、記者として筋を通すための知恵だと思えた。「今の時代、新聞人には三分の冷静さと七分の熱い血があったほうがいい」とのメッセージに気持ちを新たにしたい。

佐賀新聞報道部記者
古賀 史生

書いた話 書かなかった話

昭和の巖窟王・吉田石松事件

アリバイ証人を探して

中村 登記夫

昭和三十五年（一九六〇年）六月、名古屋には何百万人が住むのか、その中から一つの顔を探さなければならぬ。その顔は、四十八年前の殺人事件の夜、名古屋市郊外千種町の花村静江宅で塀の外をうろついていた男・吉田石松を見ていた。堀場梯助という名前だけで、年齢も住所も生死すら不明だ。

八月に始まるラジオの報道番組『目撃者の記録・俺は無罪だ』は、昭和の巖窟王と呼ばれた吉田石松事件の再審を取り上げることになっていた。その取材だった。

○：堀場の発見が条件だ
吉田石松の名を知る人はもう少

ないだろう。大正二年八月十三日の夜、千種町の路上で殺人事件があり、翌日、聞き込みで警察は犯人二人を逮捕。二人は犯行を認め、主犯は吉田石松だと供述を変えた。石松の逮捕は翌十五日昼。彼はアリバイを主張、一貫して犯行を否認したが、一番は死刑。翌年、大審院で無期懲役となった。

石松三十二歳。つづく二十三年を刑務所で過ごし、仮出獄したのは昭和十年だった。戦前と戦後計四回の再審請求はすべて棄却された。八十歳になった石松は、最後の願いを日本弁護士連合会人権擁護委員会に訴えた。

石松が語るアリバイはこうだ。

〔犯行時刻、静江を訪ねたが先客がいた。塀の外をうろついているとき、知らない人だが先客に顔を見られた〕

その先客の一人「堀場梯助」の名は記録にある。だが時は流れていた。主任弁護士で再審を主導した後藤信夫弁護士も《原審記録はすべて焼失し、関係者もほとんど死亡もしくは行方不明》という裁判の困難さを覚悟していた（後藤信夫著『昭和の巖窟王』）。

人権委が発見した花村静江の録音を聞いて、番組第一回はこれだと決めた。だが上司は「この堀場を見つけないきゃダメだ。ゴールデンアワーの新番組だよ」。

○：ほったらかしだった証人たちの取材は、私と山林アナウンサーのコンビだったが、取材開始時、石松関係で情報が分かっていたのは雇い主の加藤半十郎一人だ。話には内容はなかったが、彼は古い硝子工場のことを口にした。石松の仲間が分かるかもしれない。そこで、早川良一の名を聞いた。

早川は石松の逮捕現場にいた。

刑事が来た時、石松は「何しに行かならんナという顔しとった」。逮捕まで石松の様子は普通だったと記憶している。「堀場梯助を知りませんか」「知らん。だが、夜遊びなら渡辺惣市だ」。

自転車屋の隠居となっていた渡辺は昔の記憶をたどった。「石松が工場に来て、遊びに連れだした。その時、娘を紹介したワ、確か、しずといった」。その夜はしずの家を教えただけで帰った。事件の数日前である。石松と静江を結ぶ糸が確認された。隠居からさらに、仲間の伊藤庄次郎を紹介された。

伊藤の証言は貴重だった。石松に、逮捕の前日か前々日「しずの家遊びに行こう」と誘われた。だが「用があつて断った」。石松も「その夜、友人を誘ったが断られ、一人で行った」と語っている。両者の話は完全に一致する。その日が「八月何日だったか思い出しませんか」。無理な問いに彼は首を振った。「時の流れ」という越えることのできない壁だった。

驚いたことに、三人とも事件について聞かれたのははじめてだと

いう。この裁判は、何を調べて、一人の人間を裁いたのか。

○：一つの顔が、いた

残るは堀場梯助だ。堀場が存命で名古屋にいと仮定する。花村は今の北区にいた。北区をあたるう。区役所で「大正二年の戸籍簿が残ってますか」と聞く。「戦災で焼けた」の返事で糸は切れる。事情を話すと埃まみれの戸籍簿の山を運んできてくれた。分厚い綴りが机に積まれた。ページをめくり、堀場の姓名を全部捜す。見かねて職員も手伝ってくれた。大正

吉田石松事件 大正2年愛知郡千種町(現名古屋市中区)で小売業者が殺害された。先に殺害容疑で逮捕された男二人の供述によって、吉田も逮捕される。第一番は吉田は「死刑」、二人は「無期懲役」。一貫して無実を訴える吉田は獄中から二度再審請求、大臣請願五回。仮出所(昭和10)後、出獄していた二人を探しだし「詫び状」をとり三度目の再審請求をするがこれも棄却。その後、日弁連が特別委員会を組織、衆院法務委員会も動きだし、昭和37年第五次請求に対してついに再審開始となる。翌年「無罪」確定。再審史上初の冤罪がぬぐわれた事件で、半世紀にわたり無罪を主張し続けた吉田は「昭和の徹魔王」と呼ばれた。

二年のたぶん二十代の堀場はいないか。堀場、堀場……。何時間たつたろう。堀場貞助が、あった。ただ、貞助で「梯助」ではない。でも、こんなに条件がそろった「テイスケ」が他にいるとは思えない。

教えられた雑貨屋には年格好のじいさんが座っていた。「おじいさん、昔のこと聞きたいんですけど」。群衆の中のたった一つの顔が、そこにいた。「その夜は大野という仁と一緒に、外へ出てどんなヤツやというぐらいいのものや、そんな男がおったぐらいいのこのやナ」。

大正二年八月十三日夜九時、花村静江宅の周辺で繰り広げられ、幻のように思えたドラマが、現実の情景となつて浮かんできた。

○：翁の余生に幸多からんことを日弁連は《中村登紀夫指示の伊藤庄次郎、堀場貞助、早川良一らを尋問：それが再審請求の力強い支えになつたのである》(後藤・前掲書)。

三十六年四月十一日、名古屋高裁。裁判長の声が響く。「本件の

再審が決まった夜、左が若き日の筆者



再審を開始する。

総立ちの法廷の中央に、ただ独り座りつづける石松の目に涙があふれ、やがて笑顔になった。夜、祝賀会でビールを注いだ。ふるえる手でうまさうに飲んでいた。

昭和三十八年二月二十八日午前十時。判決。《被告人は無罪》。

小林裁判長は判決の最後をこう結んだ。《被告人、否、ここでは被告人というに忍びず、吉田翁と呼ぼう。あらゆる迫害にたえ自己の無実を叫び続けてきたその不撓不屈の精神力に対して、深甚なる敬意を表しつつ、翁の余生に幸多からんことを祈念する》。小林さんは裁判官である前に人間だった。面映ゆいが、後藤さんの本から

引用する《石松にとって何よりの救いは報道関係者の支援だった。七人の新聞記者以外に、ラジオ東京の中村登紀夫と山林正明の名を忘れてはならない》。石松と一緒に三年間に何本の番組を放送しただろう。ラジオ東京は一切の制約なく、すべてを任せてくれた。

吉田石松が幸多き日々を送ったのは、わずか九カ月だった。

十二月一日、石松死去。巨星墜つ、なんて、ぢいさんらしくないナと思いつつも、石松こそ再審裁判の「戦前」に終止符を打った男だという思いはある。後藤さんと一緒に仏前に座つた。祭壇のぢいさんはにこやかに笑っていた。



なかむら・ときお会員 一九三一年生まれ 五四年ラジオ東京(現TBS)入社 社会部 報道部で録音構成担当 テレビニュース部副部長 「レポート・TBS S6」プロデューサー 番組宣伝部長などを務め 九一年退社

●池田小事件・宅間裁判

ワーキング
プレス

被害者支援高まる

▼堀川 剛護

(毎日新聞大阪本社社会部)

犯罪史上例を見ない異例
続きの事件だった。

宅間死刑囚は逮捕直後の
大阪府警の調べに対し、精
神病を装ったため、当初は
匿名報道とした。しかし、
すぐに具体的な供述を始め
たため、責任能力がある可
能性が高く、八人の児童の
命が奪われるという重大性
を考慮して、実名報道に切
り替えた。さらに、事件に
つながりそうなプライバシー
を深く掘り下げた。

一方、事件が異例なだけ
に、被害者・遺族支援の取
り組みについても試金石だ
と言われた。

大阪府警は事件直後、死
亡した八児童の遺族に支援
捜査員を配置し、精神的ケ

アに取り組んだ。捜査状況を報告
したり、寝込んだ親に代わり、子
どもの通学に付き添ったり。捜査
員たちは涙しながら、遺族から調
書を取ったという。

裁判が始まると、大阪地検は遺
族を対象に公判ごとに説明会を開
き、弁論趣旨などを解説した。大
阪地裁でも遺族への配慮が目立っ
た。被害者・遺族の傍聴席が確保
され、遺族の証人尋問では、ビデ
オリンク方式が採用された。

特に、判決公判では、「宅間被
告と同じ部屋にいたくない」とい
う遺族に対し、法廷外の部屋でモ
ニターを使った傍聴を全国で初め
て許可した。ただ、モニターの故
障で、法廷外で傍聴した遺族は判
決言い渡しの大部分を見ることが
できなかったが、裁判長が閉廷後、
部屋を訪れて、謝罪し、判決内容

を説明した。遺族への配慮が顕著
に現れた場面だった。

〇〇年十一月に改正刑事訴訟法
と犯罪被害者保護法が施行され、
裁判での犯罪被害者の地位が向上
した。付属池田小事件はまさに典
型例で、今後の被害者・遺族支援
のあり方を確立したと思う。

こうした支援の背景には、遺族
側に支援する弁護士が付いたこと
も大きかった。事件後、間もな
く、刑事事件の被害者支援に取り
組む弁護士らが遺族にアプローチ
した。弁護士らは、我々取材記者
と遺族との間に入り、記者会見を
設定したり、八遺族の意見の取り
まとめにあたった。名前や年齢を
出してほしくない、顔を撮影して
ほしくない……。遺族の要望は多
岐にわたり、支援弁護士が一覧表
にまとめて記者クラブに申し入れ
た。私たちは遺族への配慮から、
ほぼ要望に応じた。

マスク取材について、ある遺
族は七月に東京で開かれた新聞労
連の第十六回記者研修会で講演し
ている。

その遺族は、事件直後のマスク

取材には「憎悪と恐怖が染み付
いた」といい、現場上空でマスク
ミのヘリがうるさく、救急隊の無
線交信に支障が出た▽自宅にマス
コミが押し寄せ、買物にも行け
なかった——などと指摘した。

しかし、「事件の検証や発生原
因、責任の追及や究明はメディア
の大きな役割。メディアに支えら
れた面もある。信頼できる記者と
の関係継続したい」との思いを
語った。

北朝鮮からの拉致被害者への取
材では、ほとんどが代表取材で、
代表社の記者がほかの社の記者に
レクをするという形態を取った。
予定が立たない事件現場で果たし
て代表取材が通用するのは分か
らない。しかし、捜査当局や司法
現場でこれだけ配慮が進む中、私
たちマスクがどこまで被害者・
遺族の立場に立って取材できる
か、あらためて考えるいい機会で
もあった。

ほりかわたけもり 一九九四年入社 青森
支局などを経て 九九年大阪社会部 現在
司法担当

香川発



讚岐路

九月半ば、ある交通事故の記事が目にとまった。香川県内の高速道路で県外の女子大生五人が乗った乗用車が衝突事故を起こし、全員が三カ月―三日のけがを負った。原因は「バンドル操作を誤ったらしい」とある。ここまでなら、さほど気にも留まらなかったのだが、その後の一行に時代を感じずにはいられなかった。「五人はうどんを食べに行く途中だった」。

今、讚岐路はまさにうどんブーム。メッカ巡礼を思わせる光景が繰り返り広がられている。一杯七十―二百円のうどんを求めて有名店には平日でも県外ナンバーが押し寄せる。関東、京阪神、九州と広範囲にわたり、バスやタクシーも交じる。店先に長い行列ができ、ガードマンが連日、交通整理をしなければならぬ店まで出てきた。

香川には、現在七百―八百軒のうどん店がある。そのうち熱い支持を受けている店は、ほとんどが昔ながらの製麺所だ。その魅力は大別すると▽山の中や田んぼの中など意外なロケーション▽店ごとに違う麺のこしや出汁の味▽値段の安さ▽揚げ物など副食物の特色や自分でネギを刻んだりする店独自のシステム▽無愛想だったり頑固だったりする店主の個性―。客は五つの驚きを味わい、面白がっているようだ。

この全国区のブームの発端は、

“うどん巡礼” 県民も魅力を再認識

▼岩部 芳樹

(四国新聞社編集委員室)

昨年県内数社が競うように東京進出を果たしたことに負うところが大きい。「百円セルフうどん東京進出」「和のファーストフード」などとして各マスコミに取り上げられた上に、「さぬきうどんダイエツト」といった健康法まで登場してブームに火が付いた。「安い、うまい、はやい」の三拍子に、香川独特のセルフ方式がデフレ時代に受け入れられたといえそうだ。

香川県内でのブームはそれ以前からあった。一九八八年の瀬戸大橋開通による観光客急増に伴うブーム、九五年前後の県内情報誌による怪しい店を探して食べ歩く静かなブームを経て、今回の全国ブレイクがある。十分な下地があり、東京という情報発信基地を通して拡大、増幅した格好だ。

ブームの影響は多方面に出ている。うどん業界は強気の出店戦略を展開。国内では東北進出や東京での二十四時間営業、海外では韓国、ニューヨーク、トルコ出店などが相次いだ。

観光業界も活気づいた。JR四国が二〇〇二年九月から走らせて

いる「さぬきうどん探検バス」は今夏、満席状態。遅れまいとタクシー業界も今夏参入した。旅行代理店ではツアーの引き合いが増えているという。

一方で気掛かりもある。ブームの後で、よく言われることだが、味の低下や素朴さの喪失、地元県民の敬遠現象などだ。これまで、幾度となくブームを経験してきただけに、その愚だけは繰り返してほしくない。ブームはいつか去る。

だが、最も身近にあったうどんを、これほど魅力に満ちた存在として香川県民に再認識させ、自信を与えてくれたことを忘れてはならないと、「ぶっかけ」をすすりながら思う、このころである。

(いわぶ・よしき)

香川県メモ

旧国名は讃岐(さぬき)。県都の高松市など7市30町からなり人口は102万人。県土は1875平方キロで全国最小。特産品はうどんのほか丸亀団扇、スポーツ手袋、松の盆栽など。観光名所には金刀比羅宮、源平の古戦場屋島、栗林公園や「二十四の瞳」の舞台小豆島などがある。

昭和基地
便り ⑤

八月二日、テレビ放送五十年を記念した夏休みの特別番組で南極からの中継があった。南極の美しい朝焼けや南十字星、さらにうまくいけば、オーロラをご覧いただくはずだった。ところがまったく違った展開になってしまった。

放送の二日前の朝から前線と低気圧が接近しはじめ、ブリザードが吹き始めた。雪と風が時間を追うごとに強まり、翌日の夜には視程が一瞬にまで下がった。外に出れば自分の足元も見えず、基地の中でも自分の位置を見失って遭難してしまいかねない。風速は最大瞬間風速で五・九メートルを観測。基地では、外に出るのは危険だとして小島秀康越冬隊長が外出禁止とした。建物から一切、出ることを禁じるものだ。

そのとき私たち五人は南極ハ

南極から台風中継

イビジョン放送センターと中継を行う現場の情報処理棟という二つの建物にいた。昭和基地は風呂や個室などがある居住施設はつながっているが、観測を行っている建物や放送センターは別々の棟になっっている。外出禁止となれば、そこから出ることはできない。

放送センターには、下野戸憲義チーフエンジニア、佐々木元チーフディレクター、それに高橋直幸ネットワークエンジニアの三人が泊まり、松岡準志カメラマンと私は中継現場の情報処理棟に泊まり込んだ。水やカップめん、寝袋も用意した。

放送当日午前六時過ぎ（日本時間は正午すぎ）。ブリザードはやまず、中継はブリザードの模様を伝えるものとなった。外は風速三〇以上の風が吹き続け、地響きの音が伝わってくる。築二十年以上の情報処理棟は、ブリザードで音を立てて揺れた。風速や

地響きなどブリザードのさまざまな音を刻々と伝える中継は、さながら日本を襲う台風の中継のようであった。

南極は大気汚染も少なく、朝焼けはあかね色がとても美しく、立ち止まって見とれてしまうほどだが、ついにそれをご覧いただくことはできなかった。しかし冷夏とはいえず、日本の真夏にブリザードの中継とは気持ちだけでも涼しくなれましたと、知り合いからメールで感想をもらった。

中継は回線や放送の時間枠、そして時差の関係から、放送時間は限定される。だからブリザードの中継しようとしても、なかなかできるものではない。というわけで、最初で最後の、ブリザード中継だったかもしれない。

NHK社会部 藤田 浩之

※NHK越冬取材班の奮闘が続きます。十一月二十四日には、南極の白い大地に黒い太陽が出現する皆既日食の中継が予定されています。



「本と新聞の情報革命
—文字メディアの限界
と未来—」

（毎日新聞出身）

秋山 哲

「文字離れ」は存在しない。文字情報は、画像情報よりも、音声情報よりも、安定的に成長している。文字は人間にとって基本的なコミュニケーション・ツールだから、当然だ。文字メディアが苦しいのは、文字というコンテンツを運ぶコンテナが、紙からデジタル・ネットワーク・メディアに変わっていくからだ。したがって、文字メディアの進むべき道ははっきりしている。その道を誰が切り開くのか。このようなことを論究している。

（ミネルヴァ書房 三、五〇〇円）

法人会員代表変更

AFP通信社

（新）フィリップ・アグレ

東京支局長

（旧）フィリップ・リエス

◇個人D会員

プロフィール

九月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

情報発信

上映会「掘るまいか」 新潟県山古志村の村人たちが、つるはし一つで十六年かけて千メートルのトンネルを掘った記録映画が作られた。建設省詰めを長く経験した四方洋会員（毎日出身）はこの話を聞き、東京で初の一般向け上映会を企画した。長島忠美村長も駆けつけ「かつては六、七メートルの積雪に埋もれ五カ月間車も来れないような村だった。先人は命と生活を守るためにこのトンネルを掘った。この山古志の精神を誇りに思う」とあいさつ。四方会員も「道

新幹線品川駅見学会

すでに利用された方もいるかもしれませんが。十月一日から、新幹線が品川駅に停車するようになりました。開業前の九月十九日に見学会を行いました（参加100人）。約一時間でホーム、コンコースなどを見学。パリアフリー対応はもちろん、各種案内表示の文字を従来の一・五倍の大きさにするなどの工夫もされていました。

説明役は宇野護広報部長はじめ甲坂友昭新幹線鉄道事業本部企画



1日6万人の利用が見込まれる新ホーム

路問題が云々されているが、公共事業を考える一つの手だてになれば」と。

棚田、錦鯉、闘牛：豊かな自然が残る人口約二千二百人の小さな村は朝の連続テレビ小説「こころ」にも登場し観光客が急増らしい。

(9・6 10階ホール)

「コトバのチカラ」キャンペーン 民放ラジオ局百一社が十一月十日まで統一キャンペーンを展開中だ。そのお披露目会見で民放連ラジオ委員会委員長の文化放送・佐藤重喜社長は「ラジオはコトバを通じてコミュニケーション

を図るメディア。言葉について考え、言葉の持つ力を再発見してもらいたい」とあいさつした。

「スキな、キラいな、残したいコトバ」「心を動かされた歌詞(うた)」のテーマでリスナーから寄せられたエピソードを、百一局それぞれ百一人のパーソナリティがキャンペーン番組の中で紹介する。この日ステージでは、キャンペーンのシンボルキャラクターである徳光和夫アウンサーとタレントの優香による模擬番組も行われた。(9・8 10階ホール)

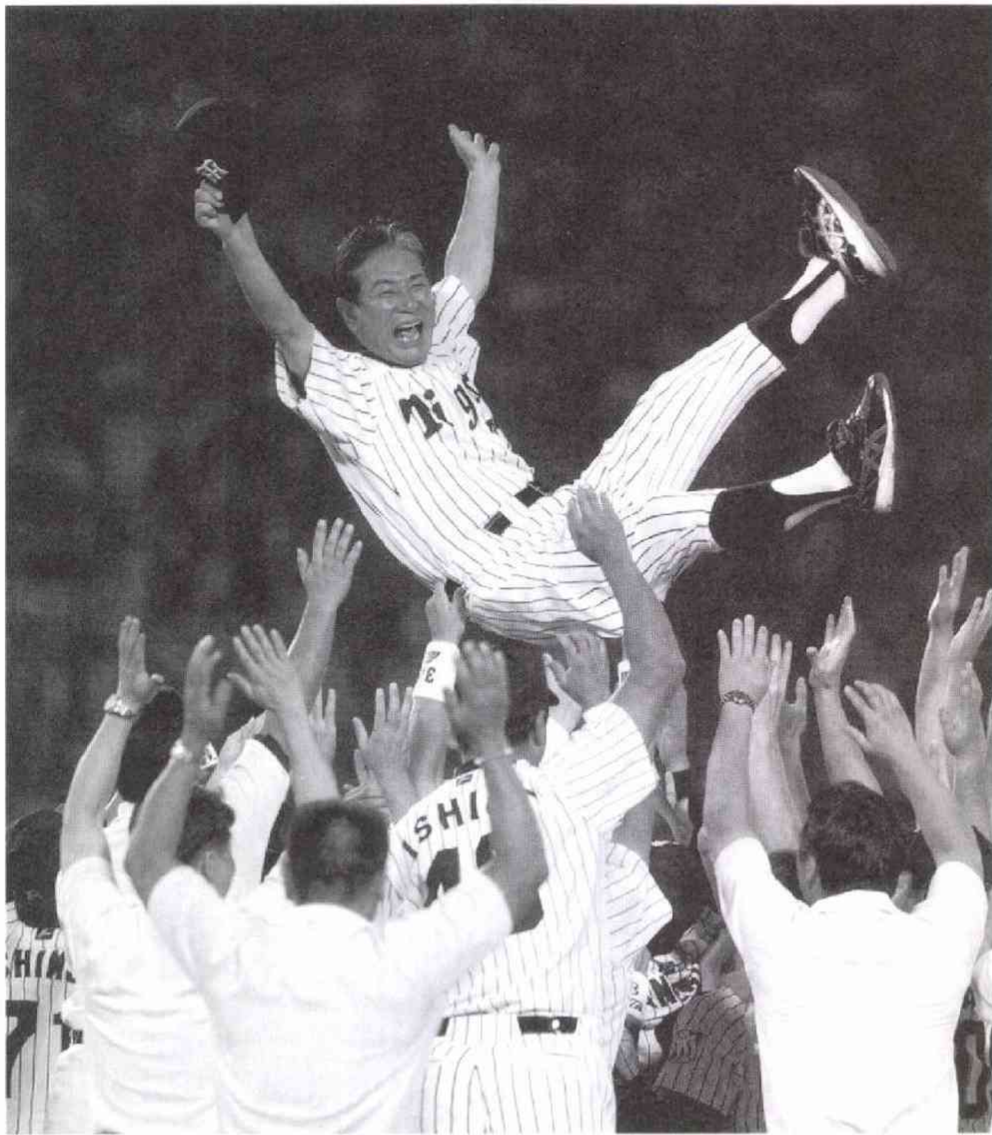
部長、阪堂史朗準備駅長ほかの方々。ダイヤ改正で「のぞみ」中心の編成になったことに絡めて「のぞみではジパング倶楽部(高齢者向けの会員制優待サービス)の割引がきかないのはなぜですか」など、出席者の幅広い質問にも答えてもらいました。

なお、賛助会員のJR東海には、リニアモーターカーの時速五〇〇キロ試乗・見学会も検討してもらっています。(村上)

写真部

写真 吉田 風

（一九九五年デイリースポーツ入社 広島支社 編集部などを経て 一九九九年から大阪本社写真部）



(9.15 甲子園)

心に火をつける

甲子園には、やはり魔物がいた。ロードでは、マジック減らしに苦しんだ阪神が、この日超満員のトラ・ファンに励まされ、八回広島に追いつき、九回サヨナラ勝ちでマジック1。一方横浜球場では、初回四点多りリードしたヤクルトが、終わってみれば横浜に逆転負けで、あつという間にマジックはゼロ。阪神十八年ぶりのペナント獲得が決まった。

宙に舞ったオトコ星野の晴れ姿と直後の談話には、ファンならずとも胸が熱くなった。

ダメトラ変身の決め手は、いったい何だったのか？

だけれども、星野マジックを伝授してほしいところだが、結局それはマニュアル化不能の、心の世界に属するらしい。

おだてやすかし、アメやムチを超えて、選手と心を通わせ、選手の心に火をつける……、そんなリーダーシップのありようが、

“奇跡”を生んだのだ。

心でなく形をまねる数千人がどぶ川に飛び込んだり、言葉先行で実の見えない政権が居座ったり……、一億総しらの日本人の胸に、火をともしてくれる指導者はいないのか……？

（堀内 敏宏）

二〇〇四年度「日本記者クラブ賞」

候補者をご推薦ください

「日本記者クラブ賞」は取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰するものです。スクープ賞ではなく、最近数年間の業績が顕著であることが重視されます。ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような候補者をご推薦ください。

候補有資格者は会員およびプレス会員社に属する方々です。応募締め切りは明年一月三十一日（土）まで。詳細は事務局へお問い合わせください。

リトル・プリンセス

吉富さんのカクテル

その月の花言葉にあわせた吉富カクテルのサービスが始まりました。十月の花は秋風に遊ぶ桃色のコスモス。フラワー・メッセージはもの本によれば「少女の純潔」。クラブの「人間国宝」氏は、これを品よく「少女の願い」にして、ダークラム、スウィートヴェルモン、チェリーブランデーをシェイクして提供中。夕刻のバーでお試しを。

秋のゴルフコンペを開催します

第82回ゴルフ会を左記のように開催します。

日時 十月三十一日（金）午前八時集合
コース 川崎国際生田緑地ゴルフ場
会費 五千円（パーティー代）

*プレー代は約一万六千円です

八組三十二人を予定しています。ご夫妻での参加も大歓迎です。お申し込みは事務局の小橋まで（3503-2728）。

会員の著書（ご寄贈いただきました）

スタアリン秘録

斎藤勉会員

日露外交

寄贈書

新聞協会報 平成十四年 日本新聞協会

招待券

朝日新聞社から「大英博物館至宝展」、読売新聞社から「ルドウィーテ展」「ガウディ かたちの探求」、日本経済新聞社から「大徳寺聚光院の襖絵」「ワイルドライフ写真展」、片岡護会員から「新芸術展」の招待券をいただきました。お礼申しあげます。

訃報

佐川嘉秀会員（日経出身、70歳）が九月十三日急性心不全のため、楠田實会員（産経出身、78歳）が同二十九日肺炎のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

クラブの電話

（ダイヤルイン）

- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
- ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
- ・貸室予約 3503-2724
- ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
- ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
- ・会員事務 3503-2725
- ・経理 3503-2728

新しい会員名簿をつくります

十一月現在で、今年の会員名簿を作成します。個人D会員、特別賛助会員のみならず、住所、役職などに変更がありましたら、至急、事務局へお知らせください。D会員で、自宅、勤務先の住所・電話番号を掲載しないことを希望される方もご連絡ください。担当：本庄、長谷川（電話：3503-2722 FAX：3503-7271）

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員

八〇五人 個人会員 一、七三六人 法人・

個人賛助会員 八二社 二一〇人 特別賛助

会員 六七人 名誉・功勞会員 一二人

計 一三二二社 一、八三〇人

会報委員会

委員長 住田良能

委員 仙石伸也

永井多恵子

橋場義之

福沢亜夫

元田 成

連絡 長谷川和子

本庄五月

電話 〇三―三五〇三―二七五二

FAX 〇三―三五〇三―二七二一